

定本
橫光利一全集

定本
横光利一全集
第九卷

河出書房新社

定本 橫光利一全集 第九卷

昭和五十七年三月二十日 初版印刷
昭和五十七年三月三十日 初版發行

著 者 橫光利一

校訂者 栗坪良樹

發行者 清水 勝

發行所 株式會社 河出書房新社

東京都澁谷區千駄ヶ谷二―三二―二

電話 四〇四―一二〇一（營業）

四〇四―八六一一（編集）

振替口座（東京）〇―一〇八〇二

印刷 多田印刷株式會社

製本 小高製本工業株式會社

Printed in JAPAN

© 一九八二

目次

解題	参考作品	旅愁
編集ノート	最初の日	第四篇
栗坪良樹	梅瓶	第五篇
301	296	280 220 3

定本 横光利一全集 第九卷

旅 愁

第 四 篇

旅 愁

田邊侯爵の別邸は靈南坂に登つた裏の高臺にあつた。重い門のかかつた兩扉の門柱の間から玉砂利が見えた。矢代が鹽野と連れ立つて門を這入ると、寒むげな唇の色で、肩を縮めて出て來た大男の玄關番が二人の名を訊ねた。綠青の噴き出た樋の傍に皮の爆ぜた松の幹が逞しく、厚い薨の反りの上に枯松葉を落してゐた。

鹽野はもう勝手を知つてゐるらしく先に玄關を上つた。花鳥を描いた衝立の後には暗かつた。冷

たく光つた廊下を奥へ渡つて行つた右手の所に應接室があつたが、そこには人の姿は見えず、ただ外套が幾つか置いてあるきりだつた。

「君、よくここへ来るの。」

と矢代は鹽野の置く外套の傍へ自分のも揃へて訊ねた。

「ああ、ここは三度ほど。——こちらの方が氣樂なものだから、あの侯爵はこのの方が好きなんだよ。」

と鹽野は云ひながらまた部屋を出て、なほ廊下を奥の方へ幾つも曲つた。背丈を同じにした南天の群生した中庭を渡り廊下が通つてゐた。實の赤くいちめんに揃つた中を廊下が厳しく光り、そこを行く矢代の眼に、裏庭の廣さを示す小松林の一端が、おほどかに曲つた裾の美しい線を白い砂際によせてゐた。

矢代は鹽野を先にやらせて立ち停つた。そして、暫く中庭の美しさを眺めてゐた。彼は敷きつめられた砂の白さと南天の實の赤さから、フロウレンスのある寺院の庭を思ひ出したからだつた。その寺院の庭は、丁度こんな清潔の方形だつたが、中央にただ一本の夾竹桃がぎつしり花を咲かせ、白い築地に囲まれた靜寂な空間に艶麗な慎しさを與へてゐた。

廊下の向ふからもう由吉らの笑聲が聞えて來た。夕暮の迫る砂の薄明りを眺めながら、矢代は、今夜の會は自分にとつては一つの査問會のやうなものになるのだと思つた。自分に關する千鶴子の兄の由吉と槇三の報告が、彼女の母へ届いてゐる現在、新に侯爵のも加はつてまた届けられるにちがひない以上は、やはり自分の運命を左右する一夜ともなるのだつた。それも侯爵夫妻の一

番知りたい自分たちのことは、千鶴子と自分との祕やかな交渉が、どの程度のところまで進んでゐるものか見届けたいことだらうと思ふと、二人の間が、すでに實際の結婚以上のものまで済んでゐると見られてゐることも、十中の九までたしかな事だつた。しかし、若い男女の二人が自由に外國を渡り歩いてゐるときに生じる必然的なことが、果してそのまま當然に生じたかどうか、侯爵の方とて聞き糺してみることすら出來ず、また矢代にしてもそれだけは、こちらから示す明らかな表情もなし得べきことでもなかつた。いま何か、矢代はふとそんな微妙なことで苦しさを感じたが、鹽野の個展の祝賀會とはいへ、實は、侯爵や由吉たちが矢代と千鶴子から、その所も暗黙に聞き取りたい査問會の内容も含まれてゐる夜會となることだけは、廊下の光りを踏みつつ彼も覺悟を決めるのだつた。

「やア、いらつしやい。さきほどは失禮しました。」

離れの洋館の中へ這入つたとき、田邊侯爵は資生堂の晝間の晝廊のときとは違ひ、打ち解けた笑顔の挨拶だつた。集りの中には由吉を初め、矢代の知らぬ人人も多かつたが、婦人たちはまだ誰も姿を見せてゐなかつた。

洋館は古風ながらも、後から改造したと見えるコルビュジェ風な明るさがあつた。麻布の方を一望に見降ろせる側一面に巨きなガラスを繞らせ、鼠の地色に目立たぬ赤の模様の入つた絨毯が、部屋調度や庭を害せず落ちつけた。黒塗の棚に初期李朝の秋草の壺が一つ置いてあつて、壁額に嵌つた十七世紀の銅版畫と好個の對照をなし、高雅な趣味の滲み出てゐる部屋だつた。

ストーブの傍に集つた人人の中では、スペインの内亂に關する談が續けられてゐる最中だつた。

その中の一番最近にパリから歸つて來たといふ若い外交官が、傍の佐佐といふ畫家に突然云つた。「そら、あのクーポールにゐたスペイン人のボーイね。よく僕らの傍へ來た男があるぢやないか。あれがね、新聞を見てゐて僕に、もうかうしちやゐられない。自分の方は負けて來た。いよいよ自分も祖國へ歸つて戦ふ、と決然として云つたよ。どうもあれば、反フランコ派の方らしいんだが、しかし、どつちにしたところで、僕はそのときのあのボーイの顔色には驚いたね。決死の色だつたよ。」

一同は暫く言葉がなかつた。矢代は黙つて聞きながら、クーポールにゐたスペイン人の顔をあれこれと思ひ泛べるのだつた。そして、もし自分の國がそんな状態になつたなら、自分もやはり千鶴子のことなども考へてはゐられなからうと思つた。パリにゐる當時、たとへ嘘だつたとはいへ、日本と支那とが戦争状態に這入つたといふニュースの大きく出たことがあつたが、自分も歸つて直ちに戦ふ覺悟をしたその日のことを思ひ出した。そして、そのとき第一に頭に泛べたことは、ある誰か詠人の分らぬ衆人の中にひそんだ歌だつた。

「大神に捧げまつらん馬曳きて峠を行けば月冴ゆるなり」

矢代はこの歌が好きだつた。もう何の飾りもなく心のままに歌ひ、胸中澄みわたつてゐる人馬一體となつた爽やかな調べの籠つた素朴さがあつた。それも古人の歌ではなく現代人の作であるところに、心を別け持つてくれてゐる嬉しさを矢代は感じた。

「しかし、どうも支那も危くなつて來てゐるね。スペインの内亂と支那の今度の内亂とは關係があるよ。」

とかう云ひ出したのは由吉だった。

「それはある。他人事ぢやなさうだ。」

と外交官の速水が、高い突がつた鼻を手巾で拭きながら云つた。

「スペイン事件が東洋で起ると、今度の蔣介石の西安事件みたいになるんだね。だんだん蔣介石も共產黨に引き摺られて行つてゐるらしいんだが、さうなれば結果は抗日思想がますます高まるから、どうしてもこれは、日支戦争が避けられないといふ風に擴がるよ。」

會話の進むにつれて、矢代は、パリの眞紀子の部屋で支那人の高有明と議論をしたある一夜のことを思ひ出してゐた。高も間もなく歸るころだと思ふと、なほよく彼とも話してみたいいろいろなことが泛んで消えなかつた。

しかし、丁度、かういふ緊張した話の盛り上つて來てゐるところへ、廊下の方から久木男爵が、
「どうも遅くなりました。」

と云つて一同の方へ歩いて來た。

「今日のノートルダムのお寫眞は、あれは苦心をされたでせうね。わたしもあのお寺を寫してみることがありますが、いつ見ても良いものは良いですね。」

男爵にさう云はれて、鹽野は答へ難さうに笑つたままだつた。

「どうですか。寫眞の方でも外國人と日本人とは、見方がだいぶ違ふでせうね。」

と男爵はまた鋭い質問を續けて鹽野を見た。

「違ひますね。一度フランスの専門家に、寫したものを選んでみて貰つたことがありますが、

これが良いと云つて抜き出してくれたものは、どれも向ふで苦心をして撮つたものぢやないのですよ。日本でもいつでも撮れるものばかり抜いてくれるので、何のために自分はフランスまで来たんだらうと、しばらくは僕も苦しみました。」

若い鹽野はその當時の苦しみを今もなほ續けてゐるらしく、彼には珍らしい暗い表情になつてうつ向いた。

「いや、それは畫家もさう云ひますよ。フランスへ行くと、却つて良い畫が描けなくなると云つてた人がありましたよ。」

「人間もさうかもしれないぞ。」

と由吉はパイプにきざみを詰め詰め云つた。みなどつと笑ひ出した。

その波立ちが、急に一同の表情の上に逆な明るさを與へて一層それから活き活きと談が弾むのだつた。

「わたしも十六のときから二十六のときまでロンドンにをりましたが、どうも、外國を知らぬ先代の方が、わたしより豪いやうです。皆さん方はどうですか。」

久木男爵のさう云つて見廻す顔の中から、音楽家の遊部が、

「それはやはり、僕もそのやうだなア。」

と歎聲を洩らして笑つた。

この遊部は資生堂の畫廊へ晝間來てゐた藤尾みち子と結婚して外國へ二人で行つたのだが、歸るとすぐ二人は別れてしまつた。

食事前のアツペリティブが皆の前に出たころ、婦人たちが遅れて這入つて來た。千鶴子もそのとき藤尾と並び男の客たちから少し離れた椅子にかけた。

「久木さんはお幾つですか。年より若くお見えぢやないですか。」
と由吉が訊ねた。

「わたしは丁度赤い襯衣を着る年ですが、藝術が好きだから一向に年をとらんですね。やはり藝術といふものは、經濟よりも良いものだといふことが、このごろやつと分つて來ました。わたしは外國にゐるころから、自分の代になつたときの事を考へて、そつと自分の弟子たちに金を遣はせて將來に備へて置きましたが、自分の代になつたとき、そのものに仕事を全部まかせてしまつたものですから、今は樂ですよ。午後の三時ごろまではまア、會社へ出てをりますが、後の時間はもう全部藝術に使つてゐるのですがね。わたしは自分を實業家だとは思つちやゐないので、自分は何んだらうと考へると、やはりわたしは藝術家だと自分を思ひますね。實業よりも藝術に専心してゐるときの方が、わたしの性分かもしれぬが、氣持ちが美しくなつて一番眞面目になれますからね。」

日本の實業家連中から親玉のやうに見られてゐる久木男爵のひそかに洩らしたことが、さういふことを云ひたかつたのかと矢代は面白く思ひ、聞き捨てにならぬ美しい心の一面だと解した。畫家の佐佐も傍で何か感動したものがあつたと見え椅子の背の上で體を動かした。

「ぢや、作曲は今でも毎日されるんですか。」

數學や作曲によく専心する久木男の噂話を、由吉も知つてゐるらしくさう訊ねた。

「一日に少しはどんな日もやりますが、それよりも、やり出すと、どこかへ旅をして、一部屋へ一週間ばかりわたしは籠るのです。そのときは朝から人をよせつけません。やはり、さうしてじつと心が澄んで来ないと、雑事がちらつとも頭に泛ばうものなら、もう駄目です。良い音が出て来ませんね。」

かういふ事を云ふときの久木男の眼は急に變り、澄み透つた光りを泛べた。氣ままさうな小柄な身體の持ち扱ひながらも、争はれず藝術に鍊へられたものに共通な誠實さが顯れた。

「しかし、あなたのやうな方だと、世間が誰も藝術家だと思はないですから、そこが困りぢやありませんか。」

と、田邊侯爵が半ばひやかし氣味に云つた。

「さうさう。わたしの悩みはそれなんですよ。どんな善い物を作つても、日本の人はわたしが作つたものだと、思つてくれないのですから、これは残念です。一生懸命になつてゐるものが、一つも眞面目に相手にされないなんて、こんな悲しむべきことはありませんよ。」

思ひがけなく富貴の悲しみを聞きつけた思ひで、矢代は久木男の孤獨な顔を注意した。

「ぢや、まだわれわれの方があなたより幸福なわけですかね。」

と音楽家の遊部がアツペリティブに顔を染めて笑つた。

「いや、それは本當ですよ。わたしも日本人が相手にしてくれないので、仕様もなく、このごろはずつと外國で作品を發表してをりますが、外人はみな眞面目に取り扱つてくれてをります。相當にこれでも認められてゐるのですよ。」

冗談らしく老人のさう云ふ笑ひの陰にも、いづれこの眞實さへ皆から揉み消されるであらうと寂しむ響きが流れてゐた。

半ば繰り上げられた部屋仕切りの天鵝絨の蔭からピアノの羽根が見えてゐて、その方から食器の音が聞えて來た。矢代は千鶴子の方にはあまり視線を向けないやうに氣をつけた。そして、久木男爵の談を聞きながらも、さつきから一同の者とは違つた、ある云ひがたい、別な親しみと苦しみとの混じた氣持ちを次第に強く覺えてゐた。それといふのは矢代の父が青年時代のあるころ、先代の久木男爵の會社の社員だつたことがあつて、かすかながらも、記憶の底からそれが泛き沈みしつゝ頭を擡げて來たからだつた。たしかに今はどちらも、全く別な二家の子供たちだとはいへ、一時は父も世話になつたと思ふ子の矢代の氣持ちは自ら違つてゐた。

あらためて誰かに紹介でもされれば、ひと言それを述べ謝意を表したいと思つたが、しかし、こんなに上下の區別のない稀な會合の場合、むかしの主従關係を口にして空氣を濁すといふことは、却つて向ふを苦しめることかもしれず、また傍に千鶴子のゐるといふことが、なほ矢代にそれを云はしめるのを妨げさうな氣味もあつた。

「新年になると、社長の久木さんが社員を皆集めて訓辭をされるんだが、一年にたつた一ぺん、そのときだけ顔が見られるきりなんだからなア。」

と、かういふことを母に洩らしてゐたある日の父のひと言が、どういふものかいまだに矢代の耳の底から脱けなかつた。

父はそのことを一年中の何よりの光榮に感じて云つてゐたのに、それに自分は、今は目前對等

に久木男爵と會ひながらも、父のその欣びを隠さうとしてゐる時代の子供になつたのだらうか。――

それを思ふと、矢代は自分の黙りつづけてゐるのが苦痛だつた。しかし、この夜は彼も、男爵とのそんな些細なことで心を痛めてゐられるときではなかつた。さきからも暗黙のうちに由吉と侯爵とから間斷なく受けてゐる査問の視線も、また輕からず身を感じた。それもこれも、すべてはただほんの暫く、自分が外國へ行つてゐたためばかりに起つたことだつた。

彼はそのやうなことも知らずにゐる千鶴子が、今は何より氣の毒に思つた。それも、自分がどんなに振り拂はうと努めても、いつか身近かによつて來て去りさうにもない人だつた。いつたい、何ぜまたこの人は自分の傍へなど來るのだらう。

「あたしは日本へ歸つても變らないわ。變るのは、きつとあなたの方だわ。」

かういふことをバリで別れる際、ただ一言云つた千鶴子の勝ち氣のためかあるいはカソリックの仕業であらうか、とにかく今の矢代にはこれだけが分らぬことの一つだつた。

庭の薄明りがまつたく消えたころ、侯爵夫人が薄藤色の洋装でピアノの羽根の前を横切つて顯れると、皆のものに會釋をして食堂の用意の出來たことを報らせた。一同は椅子から立つて隣室を通りその向ふの食堂へ這入つていつた。

食堂は料理の味を害せぬためであらう全面眞白な装ひの中に、壁だけ横に細い金線が入つてゐた。客たちは正客の鹽野を先にし、自然に年寄りを高座へ押しすめながら、それぞれ年に應じた席をとつた。食事は洋食で間もなくスープが出たが、この夜のパンとスープの味は、たしかに